

今年で10回目を迎えた「城下町しばた全国雑煮合戦」が1月12日、新発田市カルチャーセンターを会場に行われ、村温泉旅館組合（小山雄司組合長・大内洩）と村商工会観光部・青年部、村観光協会が共同で出店しました。出店は今年で4回目。

今回準備した雑煮は、塩味ベースの出汁に地元産の朝日豚と7種類の山菜を使った自慢の一品で、その名も「じゃ・じゃ・じゃ！大したもん蛇雑煮」（二杯400円）。肉の旨みがたっぷり詰まった焼き立ての朝日豚と、山菜のし

ようゆ漬けを組み合わせた創作雑煮で勝負に挑みました。村上市から来た磯部俊美さんは「山菜と肉の組み合わせはめずらしい組み合わせですがとても良かったです。肉もやわらかく味もついていて食べやすい雑煮でした。出汁もおいしかったです」と雑煮の味に満足した様子。

当日は、時折雨や雪が降る悪天候の中での開催となりましたが、目標の200杯を大きく上回る約300杯の売上げを達成。結果は、50店舗中過去最高となる6位と健闘しました。

地産地消で挑んだ 4回目の挑戦！結果は…

～第十回城下町しばた
全国雑煮合戦～



食と健康の大切さを学ぶ

～関川中で食育出前講座～

1月20日から24日までの学校給食週間にあわせて、このたび関川中学校、関川小学校、女川保育園で食育出前講座が行われました。

これは、村の健康づくり計画に基づく取り組みで、子どもたちに食と健康の大切さを知ってもらおうと毎年行われているもの。講座には、健康せきかわ21の栄養・食生活部会の皆さんが訪問しました。

1月20日に関川中学校で行われた講座では、地元食材や朝食の役割などをテーマにしたクイズを出題。全校生徒に正しい食習慣や規則正しい生活の大切さを伝えました。

給食委員長の阿部紗穂さん（2年・大島）は「早寝早起きと朝食の大切さが分かりました。早寝をする方ではないので、これからはきちんと早い時間に寝られるように努力したい」と話していました。



わたしたちは差別をしない！ 差別を許さない！

～関川小で人権教育～

1月16日、関川小学校で道徳授業の授業参観が行われ、各学年とも人権について学びました。

6年生の授業では、教材「生きるⅢ」を使って、人権の歴史を学習。これまでの授業で、被差別部落問題などの歴史を学んできたということもあって、この日は今までのおさらいや日常生活の中で起こり得る差別をなくすための方法についてグループごとに話し合われました。

授業を受けた小田結奈さん（下関）は「差別は絶対に悪いこと。見た目などが自分と違うからと言って、避けたり無視したりするのは良くないと思いました。これからはいろんな人たちに会おうと思うけど、みんなと仲良くしていけるような大人になりたい」と話していました。

大人が変われば子どもも変わる

テーマは『教育』く知事とのタウンミーティング

1月23日、村民会館大ホールを会場に「知事とのタウンミーティング」が開催され、村内外から約150人が参加しました。

今回のテーマは「教育」。六三三制発祥の地である当村で、県が取り組むキャリア教育や地域・学校が連携する教育のあり方などについて議論が行われました。



▶会場では、知事と住民との間で直接意見交換も行われました。

はじめに、泉田裕彦県知事が県内の進学率やキャリア教育の取り組みなどについて報告。その中で「未来を担う人材を育てるには、職と社会と子どもたちをつなげるキャリア教育の推進が必要」と説明しました。

この日、パネリストを務めたのは3人で、村教育委員会の委員の山口良明さん（辰田新）は、小学校で行っている米づくりや観光ボランティアガイドの体験学習、また、大したもん蛇まつりなどの地域活動へ参加している中学校の活動を取り上げ、「さまざまな経験を通して、将来個性豊かな子どもたちであふれる村にしていきたい」と語りました。

例えば母親のイメージが強いが、社会の厳しさを知っている父親も、もつと教育に加わってもらいたい」と家庭教育の重要性を強調しました。

また、村上市で「町屋の人の形様巡り」などの町おこしに取り組んでいる県教育委員会の委員の吉川美貴さんは「地域・学校・子どもたちが連携することでさまざまなことを経験させることができる。大人が生きざまを見せることが大切。大人が変われば子どもも変わる」とこれまでの取り組みを通じて感じたことを発表しました。

タウンミーティングに参加した川鍋かやのさん（幾地）は「自分の子どもはまだ学校には行っていませんが、県や村で取り組んでいるキャリア教育について知ることができて良かったと思います。吉川さんの話がとても興味深かった」と話していました。

入所者の声を大切に…

佐藤容子さん（下関） 介護相談員表彰



長年にわたり介護相談員の活動に貢献されたとして、このたび佐藤容子さんが介護相談地域づくり連絡会から表彰されました。

佐藤さんは、平成16年から村の介護相談員を務め、村内の介護施設を月に一度訪問。入所者の声を聞きながら、アドバイスを送ったり、気になるケースについては報告書を作成したり、事業所や地域包括支援センターとの橋渡し役として活動されてきました。

今では、佐藤さんが訪れるのを楽しみに待っている入所者も多く、これまでに延べ約500人の入所者の声に耳を傾けてきました。佐藤さんは「施設では、黙ったまま車いすに乗って一日を過ごしている方が多い。話しかけると、楽しそうに昔話をしてくれて、いきいきとした表情が嬉しい。来て良かったと思える瞬間です」とこれまでの活動を振り返る一方、これからの活動について「入所されている方が気軽に話せるようにこれからも友達みたいに親しく接することを心掛けていきたい。時を忘れて、自分の体の苦しみを忘れて話してくれるような活動をしていけたら」と話していました。表彰おめでとうございました。